

# 商品開発に若者の視点

## 県内 大学と企業「共同プロジェクト」

企業と大学が連携し、若者の視点を商品や企画に取り入れる「共同プロジェクト」が県内で浸透してきた。新たな価値の創出を求める企業と、実践的な学びの場を求める大学の狙いが一致し、取り組みが広がっている。



電子パンフレットを紹介する愛媛大の学生  
＝4月28日、松山市文京町

## 実践的な学びを期待 アイデア実現 今後の課題

松山大と、かんきつ類や果実などを販売する「のうみん」（松山市）は、2008年から共同開発し、13年度までにかんきつ類を用いたサイダーシリーズ計4種を商品化。同社によると、学生のアイデアを生かしたシリーズは夏場の売り上げ増に貢献、年間で約200万円の利益につながっているという。

14年度はアポカドを使用した洗顔用「暖肌せっけん」を手掛けた。学生はせっけんに関する意識調査を行い、30〜40代の女性をターゲットに設定。パッケージのデザインやネーミングを考案した。

法学部4年曾我部稔さん（22）は働くことの楽しさを実感しつつも「一定の制限内で成果を出すことの難しさを痛感した」と振り返る。担当した経営学部の檀裕也准教授は「座学ではなく実際に開発に



松山大とのうみんが共同で開発した商品  
＝4月21日、松山市勝岡町

加わることで、社会人に必要な問題解決能力が自然に身に付く機会」と説明した。のうみんの原田博士社長は、販促や新商品開発で「斬新な発想」を学生側に期待していたとし、「学生が考えた

ネーミングやラベルのデザインが目を引くものとなったのでは」と分析。消費者目線の不足を指摘しつつも、今後の連携にも前向きな姿勢を示している。

愛媛大では、地域活性化などの研究を行う学生21人が14年4月から約半年間、JR四国とタッグを組み、若い目線で予土線の魅力発見を目指した。

「よびせん探検隊」プロジェクトと銘打って、予土線を4区間に分けて地域資源を調査。江川崎駅（高知県四万十

市）付近の橋では列車を下からのぞける穴場を見つけているなど地域の新たなスポットを発掘した。旅行プランも考案し、電子パンフレットにまとめた。参加した学生の一人、法文学部3年竹下智也さん（20）は「自然しかないというイメージの打破に役買えたので」と話し、同学部の米田誠司准教授は「地域で生活している人の息遣いを感じられるようなスポットを見つけることができた」と総括した。

JR四国の担当者は「学生のアイデアをどう実現し、企業の成果につながるかが課題」とし、パンフレットについて「学生の力で魅力的なアイデアが出た。大学側と調整を繰り返し、より良いものができた」と評価した。

創業支援などを行う伊予銀行ソリューション営業部の担当者は「今は手探りの状況も多いが、成果事例が増えれば、より積極的な連携が見込まれる」と展望した。（伊藤愛）

経済  
えひめ流